

[報告] 「大槌町津波アーカイブに向けたワークショップ」の記録

東京大学生産技術研究所 岡村健太郎

§ 1. 背景

2016年9月11日(日)から13日(火)にかけて、第33回歴史地震研究会(大槌大会)が岩手県上閉伊郡大槌町にて開催された。東日本大震災以降では、初めての三陸での開催となった。

開催地となった大槌町は、東日本大震災により非常に大きな被害を受けただけでなく、発災当時の同町の町長が津波により死亡したため、他の被災自治体と比べ復興が遅れがちであった。実際に、大会初日は東日本大震災発災からちょうど5年半の月命日であったが、いまだ町のそこかしこで工事が行われており、まだ復興への道半ばというような状態であった。

通常これまでの歴史地震研究会の大会では、開催地の住民を対象とした講演会を開催してきた。ところが、上述の通り復興も道半ばで、住民の皆さんも町の中心部から離れた仮設住宅で生活されている状態で、広く住民の皆さんに聞いてもらえるような企画を私自身が思い描くことができずにいた。そこで本大会では、講演会ではなく、少人数の参加でも成立するワークショップ形式を採用することとした。

そして、ワークショップのテーマとして、「アーカイブ」を設定した。というのも、道半ばとはいえ復興づくりの道筋がようやく見えてきたこの段階で、集落における震災前の固有の文化・歴史や、震災後の復興過程における変容を未来に継承するような取組みが重要になると考えたからである。本稿では、そのワークショップの概要を紹介する。

§ 2. プログラム

ワークショップでは、地域の文化や歴史の継承といった問題に関心のある地域住民と歴史地震の研究者で構成される歴史地震研究会の会員と協同し、地域に津波災害を記録し継承するアーカイブを設置するとしたらどのような形がありうるのかということを検討することを目的とした。そして、なぜ、なにを、どこで、だれが、どのようにアーカイブするか、グループに分かれて議論してもらうこととした。

ただし、当然研究会の会員のなかには大槌町を初めて訪問する方も多いため、まず大槌町の佐々木健氏より大槌町が持つ豊かな自然資源および文化資源

について、解説していただいた。そのうえで、アーカイブするものを具体的にイメージしていただくために、これまでに震災後の大槌町で様々な取り組みをしてきた以下の研究グループ等による成果物を会場に展示し、簡単にプレゼンテーションしていただいた。

- ・『失われた街』模型復元プロジェクト(磯村和樹(神戸大学槻橋修研究室))
- ・被災地の写真(山岸剛(フリーランス))
- ・吉里吉里語辞典プロジェクト他(浅川達人教授(明治学院大学社会学部社会学科))
- ・大槌町の写真(浅川敏(ZOOM))
- ・吉里吉里模型他(岡村健太郎(東京大学生産技術研究所))

さらに、ワークショップの議論の枠組みや基本的な考え方、事例を紹介していただくべく、二人の講師にショートレクチャーをお願いした。一人は、大船渡市の綾里地区の復興まちづくりに携わり、また同地区にて「津波と綾里博物館展」と題した展覧会を実施した都市計画家の饗庭伸氏(首都大学東京・准教授)である。そして、もう一人は、震災前から三陸を含め日本各地で災害伝承の研究に取り組み、また気仙沼市にあるリアス・アーク美術館に勤務していた経験もある民俗学者の川島秀一氏(東北大学・教授)である。

そして、7つのグループに分かれ、各グループに議論を整理するコーディネータを置くという形式でワークショップが進められた。大槌町からの参加者は10名程度と、歴史地震研究会からの参加者と比べて少なかった。それでも、各グループに最低1名は大槌町の住民の方に参加していただくことができたため、震災後の町の様子や復興の現状など基礎的な情報について住民の方から直接説明を受けながら議論を進めることができた。当然初対面の人も多くなか、各グループで活発な議論が展開された。

なお、実際の進行とは異なるが、想定したスケジュールは以下の通りである。

- ・1430-1432 趣旨説明(岡村健太郎(東京大学生産研助教))

- ・1432-1442 講演□大槌町の現状について(佐々木健氏(大槌町))
- ・1442-1447 展示物事例の紹介
- ・1447-1455 アイスブレイク:グループ毎に分かれてカルタゲーム
- ・1455-1515 グループ討議□:前提の議論(必要性、アーカイブの目的)
 - ⇒議題 1:そもそもアーカイブが必要か
 - ⇒議題 2:なんのためにアーカイブするのか
- ・1515-1525 講演□綾里津波博物館の事例紹介(饗庭伸准教授(首都大学東京))
- ・1525-1555 グループ討議□:何を、どこで展示するか
 - ⇒議題 3:何をアーカイブするか
 - ⇒議題 4:どこにアーカイブするか
- ・1555-1605 講演□津波災害の伝承(川島秀一氏(東北大学))
- ・1605-1635 グループ討議□:誰が、どのように展示するか
 - ⇒議題 5:だれが運営するか
 - ⇒議題 6:どのように見せるか
- ・1635-1655 発表
- ・1655-1700 講師の先生方からのコメント

§ 3. ディスカッション

最初に、前提として議題1「そもそもアーカイブが必要か」をテーマに話し合った。

議論の結果、各グループで、未来に歴史を伝えるためにもアーカイブは必要であるという意見が大半を占めた。特に大槌町は、これまでに幾度も津波災害を受けてきた歴史があるため、そのなかで失われた資料も多いことから、アーカイブが必要であるという意見が多数を占めた。また同町では「メディア commons 構想」として、図書館と公民館、博物館の3つを合わせた施設整備について議論されてきたが、結果的にアーカイブ機能については、ほとんど予算がつかなかったということもあり、アーカイブ機能の重要性を指摘する声が挙げられた。一方で、「アーカイブ」という言葉が何を指すのか、特に一般住民の方にイメージしづらいため、日本語にした方が良いという意見もあった。そもそも、「アーカイブ」に否定的な方が、本ワークショップに積極的に参加するとは考えにくい、議論を通して参加者の問題意識の共有は図れたように感じた。

議題1に引き続き、議題2「なんのためにアーカイブ

するのか」、アーカイブの目的をテーマに話し合った。

議論の結果、大槌の歴史を伝えるため、次の災害時に経験を伝えるため、地域の事を考えるため、教育のため、研究者のため、亡くなった人々の思いを伝えるため、など様々な意見が出された。外部から参加している歴史地震研究会の会員と、大槌町に住む住民とでは立場が異なるため、意見も違って当然である。ただし、「何もしなくては消えて行ってしまう」といった発言や、「昔は家庭で継承されていったことも、時代の変化によって継承されにくくなっている」といった発言にみられるように、意図的に残さない限りは残るものも残らないという危機感は概ね共有できたように感じた。

その後、饗庭伸氏によるショートレクチャーを拝聴した。饗庭氏がフィールドとしている岩手県大船渡市南三陸町綾里地区も、大槌町同様にこれまで何度も津波による被害を受けてきた地域である。ただし、大槌町と異なるのは、過去の津波災害による死者が、明治三陸津波では1,269名、昭和三陸津波では180名、そして東日本大震災では31名と一桁ずつ減少している点である。つまり、綾里地区は津波の被災経験や防災上の知恵などの継承が比較的うまくいった事例といえる。その要因を探ると同時に、それをさらに未来の世代に繋げるための復興計画づくりや、記念碑の設置、復興授業の開催、報告書の作成など、饗庭氏が同地区において取り組んできた様々な取り組みを紹介していただいた。また、「津波と綾里博物館」と題した期間限定の展示を同地区にある空き家にて開催した狙いや、その効果などについて具体的に紹介していただいた。

饗庭氏のショートレクチャーを受けて、議題3「何をアーカイブするか」をテーマに、各グループで話し合った。

議題2の目的を考える際に、様々な意見が出たことの必然的な結果として、何をアーカイブするかという点についても、様々な意見が出た。それらは大きく二つの方向性に分類ができる。

一つは、現時点において何らかの意図をもってアーカイブするものを選別するのではなく、可能な限り残せるものは残していったほうが良いという立場である。もう一つは、アーカイブする主体が目的意識をもってアーカイブするものを選別したほうが良いという立場である。前者については、特に東日本大震災およびその後の復興のプロセスにおいて、震災前の町が損

なわれていったという意識が強いからか、町民からそうした意見が多く見受けられた。一方後者については、各人の目的意識や関心に沿って、被災の経験を残すことが重要である、災害に限定せずに町の歴史が大事である、防災教育に役立つものを残すべきである、など様々な意見が出た。また、同時に、単に残すだけではなく、それをどう活用するのかということも併せて考えるべきであるといった意見もみられた。

次に、議題 4「どこにアーカイブするか」、アーカイブする場所について議論した。

ここでの議論も大きく二つの立場がみられた。一つは、やはり被災地にできるだけ近い場所でどのように残すかということを考えるべきであるという立場である。もう一つは、運営やコストなどの現実的な問題を踏まえ、永続的に残すために必ずしも被災地にアーカイブすることにこだわらないという立場である。

前者については、毎年開催されるお祭りと合わせてアーカイブするというアイデアや、観光客が必ず立ち寄りやすい場所の近くにアーカイブすべきであるなど、アーカイブしたものを風化させないための工夫について様々な意見が出された。後者については、前述したメディアコモンズ構想によるアーカイブがうまくいかなかったこともあってか、国の施設を作る、あるいは県立博物館に寄贈するなどして、アーカイブ機能を安定的に運営するための工夫について様々な意見が出された。

その後、川島秀一氏によるショートレクチャーを拝聴した。川島氏は、「津波災害の伝承」と題し、三陸各地に立地している「津波碑」について紹介していただいた。レクチャーでは、明治三陸津波後の津波碑と昭和三陸津波後の津波碑の違いや、供養祭などの儀礼を通じた伝承などについて、豊富な実例をもとにご説明いただきたい。

ショートレクチャーを受け、議題 5「だれが運営するか」および、議題 6「どのように見せるか」について議論した。

議題 5 の運営主体については、やはり地元の力だけで、継続的にアーカイブを運営することの難しさについては、多くの人が共感を示しつつも、時間的な制約もありほとんどのグループが具体的な運営形態について議論するまでには至らなかった。ただし、そうしたなかにおいても、アーカイブするものの性質に応じて公的機関としての大槌町と自治会などの地域組織が役割分担をするべきであるといった意見や、大学の研究者や支援に入った NPO 団体などの外部の力も

有効利用すべきであるといった意見が出た。

議題 6 の見せ方についても、十分な議論の時間が取れないなかで、学校教育のなかに組み込むことの重要性や、デジタルアーカイブなどのテクノロジーの利用、震災の経験は個人でも語り継ぐことが大事であるなどといった、積極的な意見が多数みられた。

最後に、各グループの代表者がそれぞれの議論の内容を発表したうえで、講師の饗庭伸氏、川島秀一氏、そして展示物事例として吉里吉里カルタを紹介いただいた浅川達人氏よりそれぞれコメントを頂いた。饗庭氏からは、綾里地区にて展示を行った経験から、地域がアーカイブを持つことで、地域における集合的記憶が形成される可能性について言及していただいた。また、川島氏からは、祭りや生活習俗のなかに災害の経験を埋め込むなどして、持続的に教訓を継承する仕組みを構築することの重要性についてコメントを頂いた。浅川氏からは、カルタなど遊びの要素とアーカイブを組み合わせることで、教育的な効果が增强されることを指摘していただいた。

§ 4. 今後に向けて

これまでみてきたとおり、時間が限られたなか、津波被災地におけるアーカイブのあり方について深い議論が展開されていたように感じる。確かに歴史地震研究会としては、初めての試みであり、十分に議論する時間が取れなかったこと、テーマが抽象的で議論が拡散しがちであったことなどの反省点も多かった。ただし、講演会形式ではなく、ワークショップ形式とすることで、少なくとも歴史地震研究会員と地域住民が直接コミュニケーションを取りつつ、相互の理解を深めることができたのではないかと考える。ワークショップによってもたらされた知見が、大槌町にて将来アーカイブの設置に関する議論の際に行かされるのであれば幸いである。そして何より、被災地が一日も早く安定的な生活を取り戻すことを心より祈っている。

最後に、本ワークショップの実施にご参加いただいた大槌町の町民の皆様、歴史地震研究会会員の皆様、ショートレクチャーおよび展示物の紹介にご協力いただいた研究者の先生方に感謝したい。また、本ワークショップはトヨタ財団 2015 年度研究助成プログラム「歴史研究者と写真家の協同による自律分散型地域社会の形成に向けた三陸沿岸集落アーカイブの構築」の一環として行われたものであり、記して謝意を表す。



写真1 ワークショップの様子（撮影：穴水宏明）